The Women's Magazine

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 34.　　第參拾四號

EDITORIAL: On Proposed Improvement of the Japanese Stage (Concluded).

LEADING ARTICLES: Education of woman and method of Spreading Christianity.
By Prof. M. Toyama.

A Remark.

MISCELANIES: The Model Style of woman's epistolary writings (concluded); Old-man's talk: No. III; Hair dressing illustrated, by Mr. K. Watanabe: No. IV.

REVIEWS: Rev. Mr. Matsuyama's "Ie-no-oshie"

BIOGRAPHIES: Life of Mrs. T. Kimura.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

ADVERTISMENT.

●社說　演劇の改良(下)

●叢話　女のふみ(下)○をきな演說第三席○束髮圖解第四(渡邊鼎君)

●論說　女子の敎育を論じ併て耶穌敎擴張の法を說く其四(外山正一君)及其批評

●批評　松山高吉君の家のをしへ

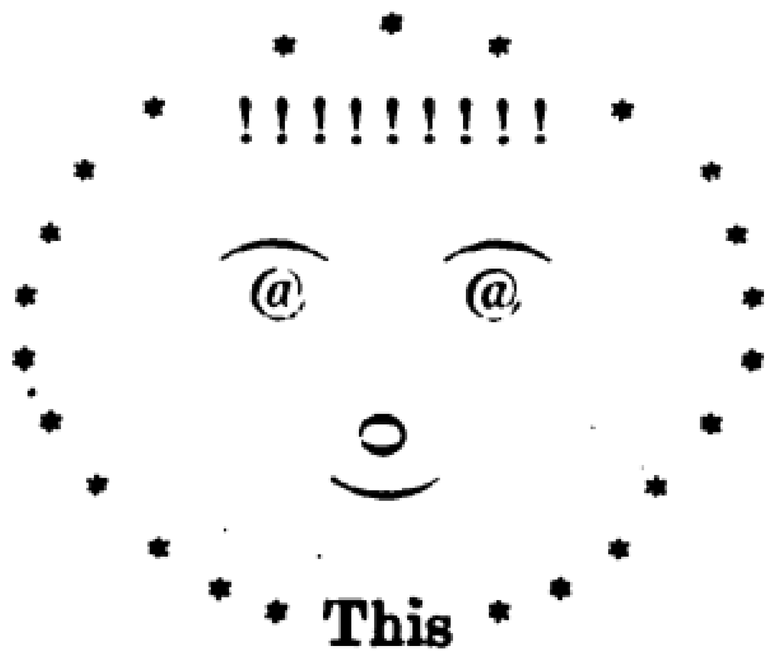
●佳傳　木村とう子の傳

●寄書　紫藤の說(伊藤順子)からし漬の方(町田みつを)英詩一章(中津洋狂)

●新報　十則

●廣告

●笑ひ草



This is a woman's natural waist which corset never yet disgraced. Inside it is a mine of health. Outside of charms it has wealth. It is a thing of beauty true, and a sweet joy forever new. It needs no artful padding vile or bustle big to give it "style." It's strong and solid plump and sound, and hard to get one arm around. Alas, if women only knew the mischief that these corsets do, they'd let Dame Nature have her way, and never try her "waist" to "stay."

小さきもの
けし粒の中くりわけて堂建てゝ一間かまへ
て手習をせん

大きもの
をし丸るめ虛空をぐつと呑けれバ須彌も天
地もされらざりけり

This is the shape of a woman's waist on which a corset tight is laced. The ribs deformed by being squeezed, press on the lungs till they are diseased. The heart is jammed and cannot pump. The liver is a torpid lump. The stomach crushed cannot digest, and in a mess are all compressed. Therefore this silly woman grows to be a fearful mass of woes, but thinks she has a lovely shape tho' hideous as a crippled ape.

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第參拾四號 明治十九年九月五日

●社説

○演劇の改良（下）

西京の諺に女の好物ハ演劇、こんにやく、藷、かぼちや、と云ふ東京の落語家ハ之を略して演劇、唐茄子、さつまいもと云ふ何にしても女の好物に演劇を第一とするハ實正なり吾人密かに日本の女流が演劇を好むの由縁を考ふるに甚だ憫れむべく又なげくべき事の多きを知るなり抑も古來我國の女に外出を許したるハ花見、寺參り、親類廻りの三を除てハ只芝居見物の一つなり然るに寺參りと親類廻りとハ素と慰みの爲にあらざれば之を樂むの心あらざるハ勿論なるに花見も亦た一年一回の遊なる上に多くの男子が殺風景にさわぎ廻る傍に行儀よく見物するを上等の心得としたれバ中なハ物言ハぬ花をながめくらす風流の女もありとハ云へど多くハ花見を大なる樂みとしもせざりしとなり此故に古來女の樂場所と云へバ只だ劇場の一なりて女流の腹中に鬱勃したる數多の求樂心ハみな此所に於て激發したり。左れバ人前に見られたしとの心、人情のかなしみを好むの情を初めとして最とゞ卑やしき女の心なんどみな此所に於てのみ滿足し得たるとなり斯て太閤時代以后數百年間絶えず此の習を遺傳としたれバ遂に今日女の好物に演劇を第一とするの輿論あるに至りしとなり

されば俳優も亦多くハ女を客として愛敬をうり相撲が男を相手とするに對し全く分業の姿を爲したり此故に女の客とあれバ茶屋に行うじなど言ひたるハ歌舞伎の歴史中たゞ二三人あるのみ其他ハみなたゞ女の愛顧を失ハざらんとをのみ勉めて怠らざるものと云ふべし。近頃大坂の俳優等申合せ其仲間に改良の約束五ヶ條を立て度やう相談したるとき趣向をかゆる事、道具立をよくする事、身態に注意する事等の條々ハ滿場異議なく同意したるに終りに至り女の客とあれバ茶屋に行く可らずとの一條を議題としたる時ハ大抵ひそうに席をすべり出でゝ後にハたゞ發起人のみ殘さるゝとなり改良の評議も全く水泡となれりときく東京の俳優ハ相應の人物も多けれバ今回の改良にかゝる奇談を現ぜざれどもその仲間總躰の人氣を穿つときハ大抵大坂の改良評議に異らざる思あるとならん」

我國の演劇ハ此如く女に關係ある者なれバ其改良を議するの今日にハ女學雜誌の記者たる者亦多少の意見を公にせざる可

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らず故に吾人ハ此關係ある限りに於て思ふ所を述んと欲するに當り先づ第一に切望する所ハ向後我國の演劇をしてたゞ女の好物とのみなさするとなく男女ともぐに之を樂しむ樣の仕組としたきとなり若し然らんにハ吾人が切に憂ひとする數多の弊害ハ乍ちにして消滅するのみならず演劇の地位も亦にはかに高尚となるべし然らずしてたゞ女流を目的の客となし善惡ともにろの批評之に一任する如きに止らバ日本の演劇ハ到底改良の見込あらずと云ふべし吾人第一の希望ハ此一事に過ぎずと雖も今ま改良會の人々に對し女學の上よりして改良を要望する條々を左に案述し其千慮の一得に供せんとを希ふ

○第一劇場づき園庭を設る事　劇場の結構にハそれぐの考もあるべし吾人の希ふ所ハ周圍に樹木欝蒼たる園庭を造り幕間よハ此處に出でゝ散歩を試み一二軒のカヒー店に腰うちかくるを得るやうの設あらんとなり婦人ハ身躰特に脆弱なれバ次に言ふ所の茶屋なるもの幸にして廢されなバ七八時間引つゞきて炭氣多き場所よ在ときハ遂よ瞑眩するに至らんとを恐る

○第二茶屋を廢する事　茶屋ハ二三回の演劇にて一ヶ年間いと贅澤に生計する程の利益を貪るものなれバ看客の會計上にも大損ある上に女に對してハ亦甚しき弊害の媒を爲すものなり故に改良劇場よハ決して此樣の附屬を許す可らず貴婦人にして若俳優を見んとせバ幕間共に園庭よ散歩して可なり身躰つかるゝとあらバ庭内のカヒー店に休息して充分なり吾人ハ今日の如き茶屋なるものゝ全く消滅するに至らんとを希ふものなり

○第三趣向を改むる事　從來演劇の趣向の下等なるとハ諸新聞に悉したれバ別に言ふを要せず但だ特に希ふハ舞臺よ現ハるゝ貞女、烈婦、賢母、孝女、等をして可成く文明國の婦人たらしむるハ勿論切めてハ明治時代の女子に相應する樣運動させたきとなり。又演劇の三段(困難の段、慰藉の段、喜樂の段、)中從來はたゞ初段のみを甚しく多くして突然後段に接するを常としたり此はたゞ演劇のみに限らず我國の小說稗史と雖も亦た孝子忠臣が敵討お家の再興等よ苦心する狀態を以て全卷を埋め最后に突然としてめでたし〳〵に移ると通常なり思に進步せざる美術の現象ハ大抵此躰を免る能ハざるなり此故に俳優ハ心中の情緒を示すを目的とせずして事情の變遷をのみ現すを主意とし歌舞妓の余習をうけて所作身態に多く力をこめ心中の情緒を顏色にあらハすの工夫をつとめずたゞ七八時間に數十年の事相を似せて專ら前後の照應を現ハさんとするが

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故に看客をしてよくも人情を穿ちたりとの感あらしむるとあしされバ之を見るの女は悲しと云つて泣くとも穿ちたりとて感ずるはあらず夕立の間程感ずるとはありとも多年肝銘するほどの思はあらざるあり見る所かく外面にあるが故に勢ひ俳優の顔を評し姿を評し或は之を粋とし或は之を温和とし團洲が情緒を示すの苦心を賞するよりは寧ろ其眼の大きやかなる様子のしぶみあるなどをのみ愛そるの習はせとあれり故に吾人は改良演劇に中段の部を多くし且つ専ら人情を穿つを目的とし今日の如く最と淺はかあるとのみを専とせざるやうを希ふものなり

○第四俳優をして理學を心得さする事　西洋の俳優は色合裝飾等の理學を窮めて寸分だも苟くもせざれば貴婦人はよく之に注意して衣服の色合摸樣より其着方風姿等を考へ或は家内裝飾の理合より交際挨拶の工合等をも俳優の技によりて心に會得すると多しときく改良演劇も亦た女流に對し此樣の利益あるに至らんとを希ふ者也

○第五俳優を交際社會に入らする事　俳優を交際社會に入らしめて紳士貴婦人共に之と交際し此社會の評判を以て一個の良心となし以て不品行不行跡を制するの便と爲さんとを希ふ

●叢話

○女のふみ（下）

然らば女の文は何如やうに認るをもて宜しとすべきやこれを一言すればたゞよく其眞心をあらはすことぞ最上の心得なるべし此故に文章の上より云はゞ古來名文と云ふもあまたあらんにかの木村長門守の妻より夫に送れる文（本誌第十六號にあり）または瀬川采女の妻より朝鮮にある采女に送りたる文（本誌第廿號にあり）などをもて女の文の鑑とすると全く夫を愛するの眞心よく紙の面にあらはれたればあるべしされば先づ第一に此の一事を心にし尙ほ左の條々を心得たまはゞ乙女は其の父母に對し妻は其夫に對し母は其子に對し殆んどうらみなきの文を得かきたまふの一助となるべし

○一　文をかゝんと思ふ前は暫く目を閉ぢて之を送らんとする彼の方の事を心に懐ひ出すべし父母あらばいろ〳〵に愛でいつくしみ玉ひし御心を考え夫あらば共にありし昔の日の樂を思ひ子あらば膝下にをきしそのかみの有樣を思ひつゞけあどし心の愛もて彼方の姿をうつし出してさて之に對して物語るやうの心地しあがらおだやかに認むべし此覺悟なき文はたゞ文句の上の世辭のみ多くあるべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

二○ 文の下書して之をかきかゆるは最鄭重なるに似たれど此際たゞ文句をかざりて眞心を世辭と見するの損あると多しすべて親しき間柄はちとのおやまりありとも只だつくろはぬが眞心と見えて喜ばしきものなれば必しも下書すべきものと心得るは宜しからず

三○ かしく、さゝへば、なほ〳〵、又々、なんどの文句いと多きが女の文の常なり吾人は之をあしゝと云ふにあらねど意を損せざる限りは成べく除くが宜し此は必竟女の文は大抵つゞけがきにて句切と云ふものなきよりの文句なれば筆に走らす思のうつる毎につゞきを切り改めて上よりかき出す様にせば自然に減ずべく又かく續きを切るときは前後に同様の事をかさぬるなどの不都合は自らに少なかるべし

四○ 文認め方の順序は初めに彼方を思ふ心の愛を十分にあらはし中比に用事のかど〳〵を右に言ふ如き躰にて認め終りに彼方をよろこばせ又はなぐさむる事々を落なくしるすべし

五○ 最初心の愛をあらはす段には思ふ丈を厭慮なく十分につゞるべし我國從來の弊として心中の愛をことごとく書きあらはすをはづかしみて何事をも大抵にするとありこれ大なる誤なり就中父母が其子に對する如きたとひ心にあふるゝ程の思ありともそを成べく嚴肅に且つ手短く認るやうにして其子に對する威嚴を失はざらんとそるは甚だ不可なり吾人が本誌の第十四第十五の兩號に論じたる如く(母親の心得附り愛育の事と云へるを見るべし)子共を育てゝ己が心に從ふやう從順なれと教ゆるは心かぎり之を愛するにありて遠々しく持なすにあらざれば何如ほどに愛情をかきあらはしたりとも其が爲に威嚴を失ひ子供を氣儘にするなどの憂あるまじきなり又娘は何歳にありたりとも父母に對しては何時も其子なれば子供らしふ見ゆるとも決してはづかしきとにあらずよく〳〵思ふ丈の愛をつゞるべし又妻が夫に對して愛心深かるべきは至當の事ゆゑこれまた決して愧るとなく其心中を言ひあらはすべきよしは既に前回に説きたる通りなり

六○ 中段用事を申すの分はなるべく手短にさりとて成べく細やかに且ついと明白に認め一二などの數字は誤りやすきものゆゑよく注意して記するべし但し父母に己が志を述るか夫に對して其をしえを乞ふか子供に對して教戒するなどの用事ならば又よく心の愛をみたして最と温和しく認むべし

七○ 最后彼方を喜ばせ又は慰むる段には人には愚かしと見ゆるほどの事をも皆な認むべしたとへば御手植の松は此頃いと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

盛々と致し候、君いまさぬ間に朝顔のみ心にくゝ咲ひ候。又ハお前が某より貰ひ來し犬も此頃ハいと大きくなりて云々隣の何がしもお前が在らぬとて最とさびしがられ候などの事は夫又ハ其子を喜ばすことと無限なり又私も近頃ハ綿入を早う得纏やう相成ぬ、先生もいと愛したまひ朋友も親しみ玉ひ、躰も太り顔のつやハ斯く相成り候などの類も父母ハ甚しく喜ぶ所のしらせなるべし其外世上の事件にて面白き事柄又ハ知り人の樣子ありさまなんどをもしらすべし

八○以上ハ母娘妻なんどが其親か夫か又ハ子供に送るときの文につき心得の大抵を示したるなり友達の文ハ以上の心得を基としたゞ禮と云へる一字をよく心にとめて認め玉ふべしさあらば愛情ふかくあられて而もあやまりなかるべし

○をさな演說（第三席）

手前の番となりましてサア何を御話しやうかとつく〴〵思ひめぐらすと何も面白いとがありませんテ尤も皆の衆ハどうせ今まで三四年遲くとも六七年でどこへかお片附なさるとだから（聽衆顔を見合はす）いつそ妻君の心得を申うかとも思ひました然しそれにハ尙早いやうでもあるから妻君となるにも娘であるにも双方に大切な一つの心得と云ふがあるそれを御話しするのが宜かろうと極めましたソレハ先づ女の職務と云ふやうな事ですが全躰女の職掌ハ餘り目立つたとがありませんて遠い開けた西洋の事ハ言ても及ばんとして我日の本で女のするとと云へば先づ夜があければ先に起て戸をあけ火を焚きつけ味噌をすつたり澤庵を揚たりしまして傍に臺處をふき座敷を掃除し夫のゆがひ手水を供えてさて御目覺は何如がと窺ひ朝飯がすめば之を洗ひ片付て了るとすぐに晝の用意晝がすめば早や夕飯のこしらへ湯殿の水入夕飯がすむと又片付に水うちやう〳〵湯から上ると早や寢床の用意に戸じまりです此上子供があれば介抱洗濯に追つかけられます下女があつても之を使ふ心遣ひは使はるゝよりもつらいものです其外四季の着物から出入の勘定、月末の拂に月はじめの買入、金が餘れば心配になる足らずば催促にこまるイヤハヤ眞につまらんとばかりして人生五十年を送つて仕舞ふやうで可愛さうなもあり當人もまた不平の折がありませう。然し此ハ反つて大なる心得違で女の職務の甚だ尊いとを知らんからのとです昔し支那に漢の高祖と云つて初ハ一軒の亭長であつたがのちにハ遂に天下をとつて皇帝となつたゑらい人がありました其の臣下にも餘程の英雄があつたが一番名高いのが三傑と云ふ三人の

とですその中にも韓信と云ふのは丈こそ低いが軍が大へんに上手で戰へバ必らず勝つと云ふて彼の勇猛の項王もついに敗られて仕舞た又張良と云ふのは謀を帷幄の内に運らすと書てある通り千里の外に考へた謀を以てよく敵の腹をうがちずん〱と之を取りました然るに其一人の蕭何と云ふはいつも都に留守番して戰場に臨んだとはなく毎日々々人に目立ぬやうなつまらんとばかり致して居ました先づ兵粮何万俵を何處に送る、金若干万を何の手にさし遣はす、今年の運上は何程で入費の預算が此程、差引て此々の金がある之をもつて宮殿の立派なるを建る、都の人口は當年何万人で死人が此れ丈け之を若干戰地に送つて殘何人、皇帝の家族が病氣で醫者は誰が宜しひ將軍の家内はともかく當方に置くが都合などと大抵まゴコンなこと斗りして日を送つて居りました之をかの千軍万馬の間に奔走して功名手柄の雷名をなぐる韓信や智謀抜群にして謀れば必ず人を驚すと云ふ張良などに比べては實につまらんとの樣に思はれます。ダカラ當時の人も蕭何を左程英雄とも思はずまして三傑の一人などとは決して考へませんでした然るに皇帝の高祖はさすが人に長たる程ですから戰が止んで軍功を賞すると云ふとき戰功第一としてその宰相に任じたのは此の蕭何でありましたそれで人々が驚天しあんな何にも功のない人が第一とはまことに不公平ではありませんかと問ひたるに其の功がないと人に見ゆるのが即ち尤も功の多い處ジヤと云つて人の不平も搆はれませんでしたが其後果して蕭何宰相の力がいよ〱あらはれ漢の天下太平よ治まりて四民も其堵に安んじたと記してあります。さて女の職掌はちようど此の蕭何の仕事によく似たものであるのです成程洗濯ぬいはりふき掃除一家の經濟家族の世話などはまことにつまらんとのやうに見えませう然し之が爲に夫は家のとにかまはず安心して世間の戰場に打て出て縱横にはたらきまはるとが出來るのですもし家の事が心配になつたり又夜家にかえつて見れば何もかも不注意で亂雜にでもなつて居たりしては始終不愉快で十分の仕事も出來んものです故に女は世間へ出て働きをしないでも内を修めて夫に安心をさせ夫に十分の働をさせたならば其働の半分は全く女の功でありますもし高祖が見たならたとひ之をあつぱれ第一の功者とまでは賞玉はぬとも夫よ劣れりとは云はれまじ手前などの考へでは夫と妻と全く同樣の功をなすとだと存じます。皆の衆は男の心持をお知りもなるまいが世間と云ふものハ隨分氣にくれんことが多い所だか

ら男ハ家を出るや否や終日不愉快の事にとりまかれて仕事をするものですだから夕方家に歸り妻のなぐさめや子供の愛らしひのを見てやう〳〵心をたのしくしてさて明朝はまた氣嫌よく世間へ出るのです然るにつかれきつて不愉快ながら家にかへるとイヤ座敷は取ちらしてある庭の掃除も屆て居らん妻も氣儘な顏をして居る家の事は一も片付て居らんまづお歸りをまちましたドコ〳〵から此樣の催促かしこからも此樣の苦情と自分で取扱ひが出來やうものを一々夫の前にならべるイヤモウこんな心得の妻君を持ちましてハ家に歸るのが少しも面白うありませんから隨て家内も睦うならず夫もよそへ宿りあるくやうになります。だから皆の衆も今からよく心得て何んなつまらんやうに見ゆるとでも夫れが女の職務ですからよく〳〵心掛て爲さなくてはなりませんよ（大喝采）

○束髮圖解（四）

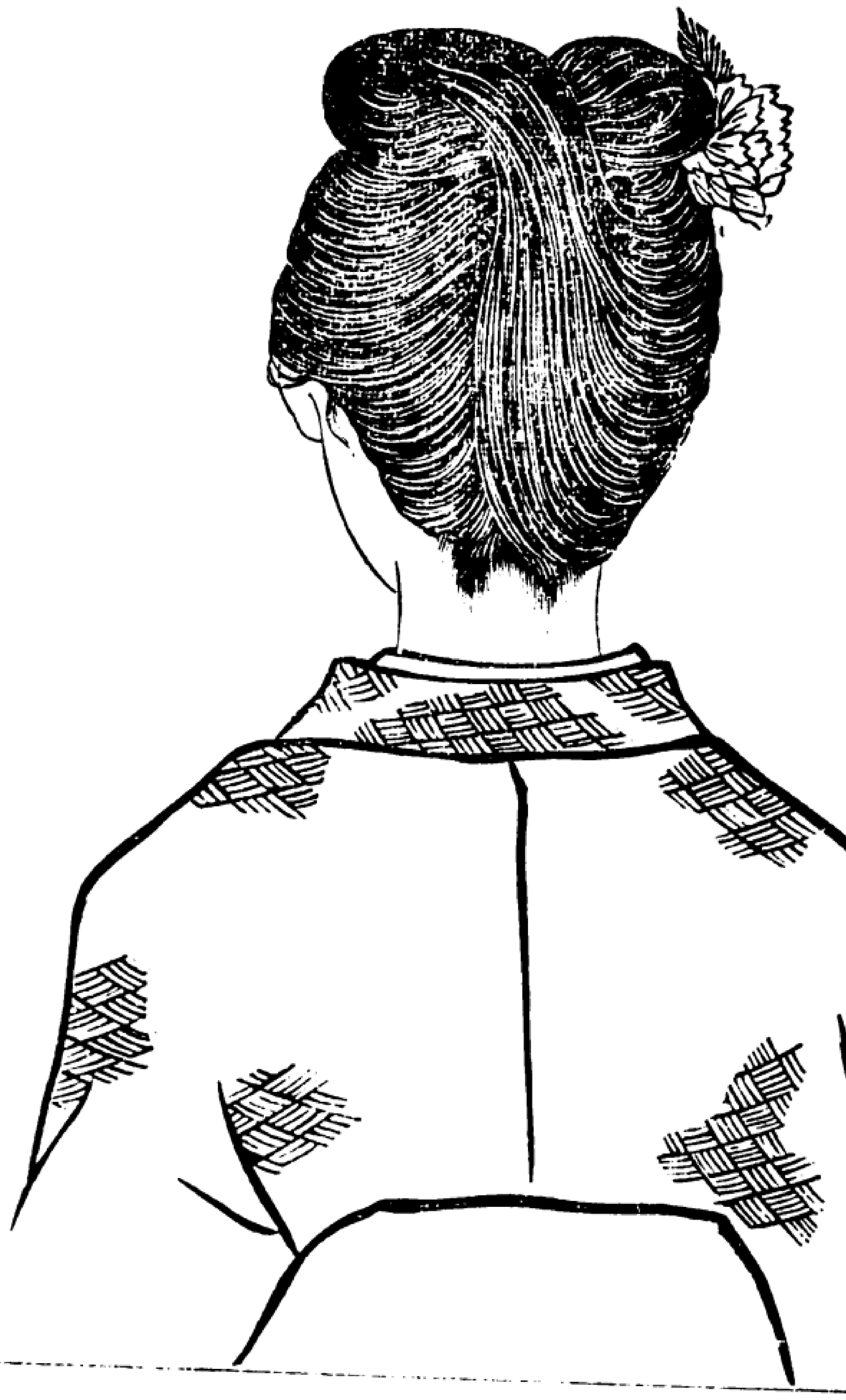
渡邊鼎

○第一朝卷き（モーニング、トウイスト）（第一圖）の結び方は多く朝の間に用ゆる者にて先づ中剃の邊にて頭髮をほどよく揃へ根元を結バずして之を手にて適宜にねじり其まゝ頭頂にもちゆき頭頂に於て左圖の如く前后に向きたる8字形をつくり髮毛の末端ハ根元に卷き付けずして周圍をヘーアピンにて留め根元に生花をさすか又は金糸等をまきつけるなり。此の卷きやうは七八才位の女子に用ひて大に活潑に見ゆるなり

○第二朝卷き（モーニング、トウイスト）（第二圖）の結び方もまた朝の間に用ゆるものにして始め第一朝卷きの樣に髮毛を揃へて頭頂に持ち行きそこにて次の圖の如く橫に∞字形を作り前后左右をヘーアピンにて留むべし然し此卷き方はあまり保存のよきものにあらず且つ帽子を被るに不便なるものにて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

只朝の間宅に居る時に用ゆるものあり



因に云ふ近頃ろハ束髪を結ぶもの非常に多くなり殊に上等社會の婦人にて學識もあり前途の先見も立ち居る人々に最も多く見受くるとあれバ今年の束髪の景況ハ昨年と違ひ下等婦女子のわい〳〵連中には少きとも上等社會にハ却て昨年より多くなりたり誠に賀すべきとにて既にある貴顯の話に上等社會のレデーの束髪洋装に改るは盖し遠きにあらざるべしと申されたるが何如にも上等社會のレデーは早くパク〳〵した蝦蟇のやうな島田や鍋蓋のやうな圓髷を廢さないといよ〳〵男子の丁髷同様一目して其人の賢愚を卜せらるゝ様になるハ近き内でありませう鴻湖のレデー方早く今の間に眠を覺し玉へ

○批評

いへのをしへ　中本一冊(二十一頁)定價三錢

此書ハ宣教師松山高吉君が一昨年の夏神戸の公會を去り玉ふ時多年牧し居たまへる人々を思ふの餘りいさゝか書つゞりて遺し玉へるを人のすゝめに任せ印行ありたるものなり小冊子なれども朝起るより夜いぬるまでの家の心得又は人に交りあいさつする心得などをも最と親切に教へて其註にハ一々聖書中の語をあげたれバ基督教を信じ玉ふ令閨令娘にハ此上なき嚴かなる教の書となるべしされど(事務に追ハるゝ勿れ事務を追ひ求め勞働を厭ふ可らず)(器物衣裳等一小品に至るまで悉く其置場を定め厨下の雜物より靴草履の如きものも一々散亂せしめず用ゐべき時に當りて捜索に時を費す勿れ)などの類何人にも心得となることも多けれバ未だ教を信ぜざる人なりとも宜しく一本を購ひて覽たまふべし但し餘りに小冊子なれバ物足らぬやう思ふ節も多かり斯る親切の筆もて更に細く教へ玉ハんにハと望ましう覺ゆるなり

● 論説

○女子の教育を論じ併て耶穌教擴張の法を説く

（其四）

外山正一

蓋し婦人の教育に余の論ずるが如き改良を要することは洋行歸りの男子が殖え西洋氣風の男子が殖るに從ッて追々切になるは自然の勢にして輓近我が邦上等社會の者が婦女子に斯る教育を授けむことを一般に希望するに至らむことは鏡に懸けて見るが如し。このおりは耶穌教擴張の爲めには實に好機會なり。この時は決して失ふべき時にあらざるなり今日まで宣教師輩が行ひ來りし宣教の法にては我が邦上等社會の人を耶穌教に歸依せしめむことは到底能はざるべしと雖ども余の説く如き法に從がはむには上等社會の人を耶穌教に歸依せしめむこと決して難きことにはあらざるならむ。日本人は教育を得むと欲して遂に耶穌教に引き込まるゝならむ。宣教師輩は宗旨の爲めには教育に從事する事は素より厭ふべからざるなり。日本人は我が欲する所ろの教育を得む。耶穌教は其の欲する所の信徒を得ん。雙方の爲めに利益多き交易は繁昌せざると云ふことなし。交易のことに英敏なる西洋人にしてこの利益をうき交易に氣の付かざるは千慮の一失と言はざる可からず。余素より宣教師輩がアチコチに設けたる一二の學校なることを知らざるに非ずと雖どもこれは余の欲する如き資格のものにあらざるのみならず又其の數の少なきを憾むなり。余の欲するは前にも言へる如く學科の高尚なることは素より要さゝれども男女の外國人の手は可なり揃ひ居らねばならぬものなり。又築地や麻布青山などの如く片よりたる場所にのみ設けずして五六の學校を東京市中の盛なる場所場所にマンベンなく備へ置くことこそ願はしけれ。文部省が高等女學校を建てられたるは實に結構なることなるが東京市中にたゞ一の女學校では足るべきにあらず。且や高等女學校の如き其の教員の多數は日本人なるが故に女子に高等なる學校教育を授くることは素より出來べけれども余が將來の日本婦人に必要なりと信ずる資格の多分は現今の高等女學校の如きものにては到底充分には得難からむ。高等女學校をして余の欲する如き教育を生徒に授けしめむ爲めには外國教師の數を大いに增加し其の組織も大いに改めずんばあらざるなり。さりながらよしや高等女學校の組織にして斯の如く其の性質を變するとするも尙ほ數多の女學校を要することは免かれ能はざるなり眞に高等なる學科を生徒に授くる高等の學校は東京市中に一

つなれば其れて素より充分なるべしと雖も余輩か廣く中等以上の婦人に必要なりと認むる如き教育を授くる爲めの學校に至りては畢竟我が邦中等以上の婦人をして學校教育を受け乍ら親しく西洋人と交際して其の風俗人情に化せしむるが大主眼なるが故に課程を高くせむよりは學校の數を多からしめて成るべきたけ廣く行はれしめむこと素より願はしきことなりかゝる目的なるが故にこれ等學校に於ては既に人の妻になりたるものにて到底正則の課程を履むと能はざるものゝ爲めには變則科を設けて西洋人と交際するの道を開き西洋風のくらし方并に交際のことより其の他總て西洋の風俗人情の一般に通ぜしむることも亦最も必要なりとす

上に陳べたる如き教育を日本婦人が要することは決して疑ひ無きことなり。而してこの教育はヒトリ宣教師社會の手を借りて得らるべきものたることも亦疑ひ無き所なり。ヒトリ疑はしきは宣教師社會の人に余の論を解し得るもの多く有る無しの一點のみ。今の宣教師の風として諸方をかけまはりて既に心のかたまりたる日本人にロクに分らぬ片言の日本語にてキヽメの薄き説教を爲すを以て宣教の道なりと心得居る者多きがごとくなれどもかゝる宣教の法はかたき地面へ僅の水をパラパラとまくと一般地に吸ひ込むものが少なく蒸發するもの多く到底骨折損が多きものならむ。これに反して幼き女子の教育よりして取りかゝる如きは柔かき地面に多くの水をまくと一般地にしみこむもの多くして蒸發するもの少なし。この宣教法の如きは最もきゝめ有るものにして最も儉約なるものと言はざる可からず

編者附評。今日我國の學風に尤も欠る所は西洋の新思想を知らざるの一事なり堂々たる記者にして西洋にはミルとバツクルとスペンセルとダルヰンとの外學者なしと思ふも多く然らざるも近く一二年のうちに起れる思想の變遷を味はざるもの尠しとせず況んや女子の如き所云る高等の女學を授けらるゝものと云ふも其實生開化したる第二の女大學を學ぶに異らず其思想其品行純然たる東洋女子の氣習を脱する能はざる比々として然り之を要するに如此きは皆な西洋人と交際し其思想を讀み其品行をよみ其感化をよむ等課外の大事を行はざるの失に因するなり此故に今ま西洋人にして我國に渡來せる者の最も高等なる人々即ち耶蘇教の宣教師及其婦人に我國の男女を接近せしむるの策は特に時弊に切中するの良法なりと云べし故に吾人は外山君の論を大に

贊成するもの也啻に之を贊成するにあらず夙に之を主張するもの也啻に吾人之を主張するにあらず今の宣教師及信徒中の主なる者は大抵此様の意見を有するもの也

此故に數年前來直接の傳道を措て專ら教育に從事するの宣教師尠しとせず今女子に關して宣教師の盡力する所を觀るに我國現今の女學校中前述せる時弊を脱して大に隆盛するの女校は大抵みな宣教師の力を盡さゞるものなし吾人の記憶する所によれバ

東京府下に
櫻井女學校○東洋英和女學校○海岸女學校○新榮女學校○明治女學校○駿臺英和女學校○長榮女塾○女子傳道學校○立教女學校○佛國女學校○女子神學校○將聖女學校○童貞女學校頌榮女學校○等あり

東京府外に
○横濱にフエリス女學校○共立女學校○聖經女學校あり○
○其外西京に同志社女學校○大坂に梅花女學校○神戸に英和女學校○備中高梁に順正女學校○伊豫松山の女學校○備前岡山の女學校○和泉堺にコルベー氏女學校○肥前長崎に佛蘭西女學校○函館に遺愛女學校及び天主教希臘教の女學校各一つ○加賀金澤に金澤女學校○仙臺に同志社分立の女學校(將成)等あり

如此きハ皆宣教師及其婦人の盡力する所なり然れども吾人は前述する所の時弊を憂ふる切なるが故に此等の女學校を以てのミ滿足するものに非ざるは勿論なりたゞ外山君が唯我卓見を得たりとさるゝに對して一言を附する耳

●佳傳

○木村とう子の傳

鐙君ハ徳川の家臣田口耕三君の女にして木村熊二君の妻なり耕三君逝き玉ふの後ち繼父樫郎君の養をうく母マチ子弟卯吉

THE REAPER AND THE FLOWERS.

THERE is a Reaper, whose name is Death,
And, with his sickle keen,
He reaps the bearded grain at a breath,
And the flowers that grow between.

"Shall I have naught that is fair?" saith he;
"Have naught but the bearded grain?
Though the breath of these flowers is sweet to me,
I will give them all back again."

He gazed at the flowers with tearful eyes,
He kissed their drooping leaves;
It was for the Lord of Paradise
He bound them in his sheaves.

(肖像の彫刻間に合兼ね不取敢英詩を塡て次號に讓る)

君今尚ほ在せり嘉永元年戊申の六月廿六日生る佐藤一齋先生はその曾祖父なるゆえに自ら名字を撰みて君を鐙と名け玉ふ母マチ子の兒を育てたまふ甚だ嚴肅にして家庭の教も他家と大に異りたれバ君は極めて幼きときより良善の教育をうけ玉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

へり特に樫郎君ハ君がすがたの男々しくて書をよむとを好玉ふを喜び當時女子の敎へは歌を唱へ三絃を奏するの類なりしに拘ハらずはやく君を小笠原敬齋氏の門に入らせて四書五經の素讀を受けさせ玉へり敬齋氏常に君の敏捷なるを愛して門下幼稚の生徒に助讀せしめられたる由を思へバ當時君が學びに得たまへる程をも知るべし又此頃都下の武士に犬塚黒兵衛氏と云へるありしが其女篠子ハ弓馬鎗長刀の術をよくして女丈夫のきこえあり篠子また君を愛して常に其家ぇ留め置き弓を射馬に御するの道をも敎へたまへり思ふに君このごろの敎育は君が心の男々しきを養ひて日にます／＼勉るの習ひを得させたるべしかゝるうちに樫郎君また早世して田口家には唯だ祖母と母と君と卯吉君とのみ存したりされバ家計日に傾きて卯吉君ハ尚ほ幼かりけれバ親戚朋友相議り君に他家の子をめあハして家を立てんとしつれど君ハすでに弟の嗣ぐべきあれバとて固く辭ひ諾ひ玉ハず妾ハ終身奉公して足るべしとハ云ハれぬ斯る勢なれバ君もこれより弓馬の技をやめ勉めて字を習ひまた山勢撿校の門人につきて和琴をまなびたまへり一齋先生の女にして河田八之助氏の妻とありたまへる鎭子は田口氏と因みあれバ常に君をいつくしみ膝下に置きて撫育至らざるなし家内經濟の事を初めとし割烹、裁縫、按腹、針治、の小技に至るまでも皆なことごとく敎へ玉へりされば君は先づ儒者に就て書經の道を學び次には英邁なる女丈夫につきて武士の妻たる藝と心とを受け終に愼密用意の風を學びてよく家妻たるの德を得玉ひたるなり。木村熊二君成童にして河田氏の門に遊び常に經書歷史を講習せり樫郎君一日坐にあり木村君が平常唐本を用ゆるを見て大に賞せり歸りて鐙君に告げたまふ汝もし夫を撰まば決して熱客俗吏に索る勿れとよりて木村君の事を語らる鐙君ふかく之を心に銘したまへり其後木村君徳川に仕へて箱舘の小吏となり奥蝦夷に入らんとし配偶を求めて得ず實兄櫻井勉君に謀らる櫻井君一日河田鎭子を訪ふて傍らに一女の侍るを見たまふ狀貌常にあらず其の田口氏の女なるを知りて歸り木村君にその賢なるをつげて之をめとらんとをすゝめ玉ふ木村君また初めより之を知り玉ふが故に大に喜んで諾さる櫻井君則ち鎭子を訪ふて木村君の意を通ぜらる之よりさき鎭子また木村君を愛する子の如く鐙君をあハせ見て其の兩兒の如しつとに之が相婚を望み玉ひけれバ亦大によろこんで之を請け鐙君ぇかたらる鐙君幼時すでに銘する所あり且つその好意を謝するも家に老母ありて弟尙ほ幼あれバ密

に憂ふる所ありたゞ幸に母の許を得バ敢て行んと答へ玉ふ君時に年十七此頃幕政衰へて俗吏事を用ひ少年剛鋭の士を輕んじて擧げ用ひず木村君また志を得ずして歩兵局に轉じたり然るに偶〻武田耕雲齋の事起りて軍務に奔走したまひけれバ久しく婚式もあらざりしが其后やう〳〵合卺の禮を行ひ玉ふの第五日征長の事起りしかバ木村君ハ別れて河田氏に寄寓し玉へり其後三年即ち君が十九の年木村君官を轉じて歸京し共に居を下谷生駒前に占め後ち一年にして一男をあげ祐吉と名け玉ふ時に明治元年戊辰の二月三日なり此年討幕の兵起る木村君一夕君につげて曰く幕政衰へて天下に兵あり吾は幕府の臣なれバ前途已に迫るたゞ幸に男兒あり汝よく之を養育し時に臨んで木村氏の祠を存せよ望む所ろこの一事のみと君云く郎君もし王事ハ死せバ妾も亦た從て死せんとを欲す然れども郎君の言あれバ妾もあへて徒らに死せじ決して家事に心を勞し玉ハずたゞ一意臣たるの道を盡し玉へと木村君これより安んじて軍事に奔走するを得て大抵家にあらず君祐吉を抱き田口氏の老祖母と母とに仕へ卯吉君を愛すること亦子の如し其孝順弟愛ある艱難の際といへども未嘗て惰ることあらざりき同年五月某日官軍彰義隊を上野に討ず都下物情恟々官軍の兵士屢バ來りて木村君の家を探ね彈丸屢バ屋壁を貫く君自ら思ひ玉ふ良人家に在らずわれ去らバ誰れか此家を留守せんわれ寧ろ此に留るべしと祖母と母とに告げ卯吉君を伴て亂兵の害を避けんとを乞ハる母涙を垂て曰ふ汝年尙ほ若し祐吉も亦幼稚あり決して玆に留る可らずと強て之を誘ひ出し玉へり此日夕六時上野に火起る彰義隊の敗聞あり君すなハち翌朝祐吉を負ふて家に歸らる木村君さきに山外にあり時をまつて内に應ぜんとして機を失するものあり遂に亂兵を避け衣服を變じて潛かに亦家に歸らる官軍隊の余黨を蹤索して置かず木村君の如き尤も危險ありき木村君則ち寫眞師下岡蓮杖の弟子となりて屢バ京濱の間に往來し其後鐙君及び田口氏を携へて横濱にうつり暫くして木村君ひとり去つて靜岡に至り別に計畫さるゝ所ありき。鐙君根岸村の農家に寄宿して祐吉を養ひ且つ田口氏をまもる赤貧洗ふが如くありけれバ困苦言ふ可らず或ハ手づから裁縫し或は夜街隅に物をうりて欠くる所なからしめたり一夜祐吉を負ふて村を出で横濱に至らんとす卒然病起りて途上に氣絶す村人の顏を知るもの過ぎ行きてこれを見やう〳〵に扶持して歸る君が肝臟に病あるを覺へ玉へるの始ハ此時の事あるべし。斯て居り玉ふと數月木村君都に上りて兩家を誘ひ

沼津に下る此時幕臣の往來するもの沼津を過れば多く木村氏に宿す鐙君之に待すると頗る懇切その德川氏の爲に盡す所ありしをよろこぶあり嘗て一士あり幇間の狀を爲し來りて宿を乞ふ鐙君之に言ふ君ハ德川氏の家臣にあらずや何ぞ幇間の狀を爲し玉ふ主人家にあらず君をとゞむるとあたハず乞ふ速かに去れと囊を拂ひ數金を出して去らしむ士はあハれだ之を慙ち三線味箱を戶外に置て去れり其後五反田村にうつり木村君ハ童兒に漢學を授け鐙君ハ常に裁縫其餘の事をとりて生計を補ひ玉へり後又靜岡に移る鐙君平常溫柔にして人と對するとき談話する能ハざるが如く自ら處女の風あり然れども事に臨んでハ果斷男子の如く雄辨流るゝが如く每事みあ人の意表に出たまへりとぞされば靜岡にあるとき德川氏木村君に月俸を給したりと雖も薄俸の數口を糊するに足らざるを知り君ハ自ら裳をかゝげて奴婢と共に米を舂ぎ菜畝を耕やし鷄をかひ麥穀をつくる純然たる農家の婦の如し初夏麥を刈り麥かぶれの病を得て面に斑點あり每年たむしを病み玉へるハ此よりあり然れども木村君德川氏の振ハざるを見て居常怏々たるが故に業の暇あれば和歌を誦し琴を撫して之をあぐさめ玉へり。此頃外山正一君米國公使館の書記に任ぜられ將に任に赴かんとして木村君を勵まし共に同航せんとす偶〻靜岡縣廳より木村君を權少屬に任ずるの令あり木村君うけず書を門外に抛ち鐙君に謀るに洋行の事を以てす鐙君默考暫くして喜んで云く眞人居常怏々として坐して德川氏の衰頽を見んよりハ洋行若干年の星霜を消し玉ふに若かじ其間時勢亦變遷する所あるべきあり戊辰の亂に妾ハ諾するに祐吉の事を以てせり家事再び心を勞し玉ふ勿れと其夜にハかに行裝を理し翌朝出發さる時に明治三年庚午十一月十八日鐙君廿三歲の冬なり。木村君發するの后鐙君の任いよ〳〵重し菜畝家鷄の收得わづかにして生計に足らず君すあハち夜は暗燈をかゝげて機を弄し反々やうやく日月を織り玉へり君が祐吉を育て玉ふや一事も苟且ならずみあ其心を開發せんとあし玉ふにあり初め橫濱沼津の間にさすらひ玉ふや艱難の際なほ祐吉を負ふてうたふに俗謠を口にせず常に唐詩選中の名句をもちひ玉へりとぞされば木村君洋行の後ハ祐吉を敎育するの任一層に深うなり君ハ畝を耕すにも機を織るにも暇あれば之に注意して專ら完全の敎を與へんとハしたまひぬ卯吉君が沼津より歸らるゝの日は繁き業事の暇をぬすみて英語を學びやう〳〵にして第二讀本を讀み得らるゝやうとなりて之をバ自ら祐吉に授けたまひぬ。斯て靜岡の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

地追々に盛んとなり演劇講談の遊びも多くなり近傍の婦女多くハ見て娯樂とせりある人君にすゝめて御主人家にあらざるに何ゆゑかく刻苦し玉ふ乞ふ一夕ともに寄席に遊び玉へと君謝して云ふ良人單身にして万里の波濤を涉り玉ふ其辛苦知るべし妾何んぞ家にありて娯樂し得ん門を出でざると數旬なれバ近人ハ君を呼んで狂婦と云へり勝安房君君の志を賞し金を贈りてその乏しきを助け玉へることありとぞ一日債主來りて最と嚴びしく督責しけれバ囊底を拂ひやうやく二分金を得て之を與へかつ債主に云ひ玉ふハ明日こと／＼く辨じ申すべし其時に來れと君たゞちに家內の古衣弊袍をとり集めて祖母及母と共に一夕數十の袖なし半纏を作り明朝千間社前の故衣商に至りて之をひさぎ立處に二圓金を得て債主の來るをまち償ひ玉ひけるとぞかゝる談話いと多きによりて君が當時の困苦を知るべし。斯て卯吉君先づ東京に登りて大藏省に出仕ありけれバ兩家族を東京にあつめ君に家中の庶務を幹するとを任じ玉へり君周旋ハなハだつとむ當時卯吉君の家計敢て裕かなりと云ふにあらざりしも君ハよく之を理めて欠くる所なからしめたる上に貧民の慘狀を聞てハ愛憐の情にたゆる能ハず直ちに金を與へて之を救ひ或ハ之を戒しめて將來の事を周旋し玉ひたりかゝる慈善の事を爲しながらよく卯吉君の必要に應して家政を調へ同君の交際上に一の不便を生ぜしめ玉はず且つその朋友を敬愛すると至らざる所なかりしかバ卯吉君の友人ハ多く君の友人となりて亦たいたく君を敬愛したり卯吉君これを以て內に顧る所なく進みて學事に耽るを得玉ひけり或人一日君の賢を稱してその術を問ひたるに君愧ぢて云ひ玉はず强て問ふとき君曰く妾にもと術あるなし唯々万事を都合よくせんと欲して終始怠らざるのみとぞ。卯吉君山岡氏を娶りて一子を擧げ文太と云ふ君山岡氏を見ると實妹の如く文太を見ること子の如く愛親至らざるなし又卯吉君が明治十二年に經濟雜誌社を創立するとき君甚だ喜びて大に周旋し日夜その事務に當られき凡そかくの如き時に至り內に欝勃せる勇氣の一時に迸り出るハ君の尤も長ずる所なれば創業の事務日に整頓したり初の程より凡そ四ヶ月間の會計ハ君全く任じてよく理め玉ひけり其後卯吉君が日本開化小史を著すときは自ら稗史小說を讀みて材料をあつめ或は開化の變遷を現はすべき圖畵をうつして卯吉君の用に供え玉へり斯るうちにも祐吉の敎育にハ寸暇も忘れ玉ふとなく撫育いたらざる所なかりき又米國にある所の木村君に對してハ屢バ書を送りて之をなぐさめ

また之をはげまし木村君米國に留學する十三年の間一回だも其歸朝を促し玉へることなくかつては木村君が歸朝せんよしを申しこされたるとき尙暫く留りて專門の學を修め玉へとすゝめ玉ひけることもありとぞ然れど祐吉いよ〳〵長じて婦人の敎育盡すあたはざる所多きを知り初めて其歸朝を促し玉へりとぞかゝれバ木村君は十三年の苦學の後ち神學を卒業して米國學士の榮位を得明治十五年の秋九月歸宅せられぬ」

余ハ此時始て木村君に面しまた同時に君を見たり當時君の風采を觀て私かに昔日の君が困苦を懷ふに慨歎すべきもの甚だ多し然れども君ハ武士の妻たる敎育を滿腔にいれて且つ天質甚だ大あり木村君十三年の不在中尋常婦女子の決して忍耐し得べからざる困難に際し君は啻によく之を耐へ玉ひしのみならず弟を助け兒を敎え家を理して一の失なきを得たるもの素とより君の美質によると雖もまた君が木村君の榮歸を望むの望よく其の心をあぐさめたるに依らざるにあらず然れども木村君を榮にすべき神學士ハ當時吾邦人の未だ決して之を榮にせざる所なりき木村君が多年苦學の後ちやうやくにして得玉ひたる美果ハ當時吾邦人の尤も嫌惡する所のものありき盖し木村君ハ耶穌敎の宣敎師として歸朝ありたるなり爾后官に仕へずして質素の自由を喜び貴紳に交らずして貧憐の老幼をかえりみ居常書生を集めて英語を授け玉ふ鐙君多年の望ハ玆に至つて全く不幸の地に死せりと云ふべし然れども君また木村君の敎をきひて初て耶蘇敎の眞理を悟り眞正の快樂は彼にあらずして此にあることを知り玉ひたれバ木村君洋歸の家づとは君の一生にとりて最上の味ありしと也。君耶穌敎を信じ玉ふてのち凡そ半年を過る間は君が心中にあまたの戰ありしことあるべし君が良人歸らバ則ち報ひ得あんと思ひ玉ひし家に君が今ま報ひ得玉ふべきハ即ち靈の品なり君が良人歸らバ則ちかゝる風にあらじと思ハせたる人に對して君が今ま示し得玉ふべきハ即ち靈の衣なり多年の艱苦につかれ果てたる身躰ハ良人歸らバ則ち休み得なんと思ひしあるべし然ども其肉は今まさらに勞働を息むべからず此の如きは皆な君が心の戰をつよくさせたるものあらん斯て凡そ半年をすぎ君が靈の經驗大に熟し基督の愛君が心の男々しさをゆるめたるのちは君が身躰いよ〳〵弱ふありて君が美質はます〳〵光をましたり君が從前の善事ハ君が敎育と勉强と忍耐とに因れり爾后君をして一見人の愛慕の念を起させたるものハ君が交際の至れるにあらずして君が愛情の深きなり爾后君が執る所の事をして悉く

よくあらせたるは啻に君が勉強によらずして君が眞心の切なるありて爾后君をして一層の不自由と不便とに甘んぜしめたるは君が忍耐の質のみにあらずして君が貧賤と清潔とを樂しみ玉へるゆゑなり君の性質にかゝる變遷のありしとは敎の經驗あらざるもの〻知らざる所ならん歟（未完）

○ナイチンゲール及梅香女史の傳續は餘白なきに付讓次號

●寄書

○紫藤の說

本鄕眞砂町十四番地　伊藤順女

（漢名）紫藤（和名）フヂ（洋名）Wisteria Chinensis.は我國山中及び叢林中に甚だ多し又人家に栽て花を賞す蔓草なれども經久の者は樹幹の如し春芽を生ずフヂデと呼び食用となるべし又飯に雜へ炊しぐ花は宿醉を醒す又敗酒を快復するの力あり衣服に酒の染みたるに用ひて驗あり其花鮮紫にして下垂し長き者は五六尺に及ぶ又白花あるものあり花後莢を結ぶ又土用藤あり南蠻藤あり葉相似て皺あり花は八重にして小さく色深く紅色を帶ぶフヂは攝州野田の產名高し花長さ七八尺紫の糸を埀るゝ如し又此蔓以て民用に供すべし春期此皮を剝取り日に乾かし釜に入れ木灰を加へて煮過し再び其外皮を去り日に乾かし藤布索繩及び草履の裏面等に用ゆ

○當座のからしづけ

本鄕弓町　町田みつを

當座に用ゆるからしづけのこしらへ方は小茄子數百と鹽二合とを小樽に入れ三日鹽にをし麴一枚半をよくこわし水三四升入りのかめに入れからし三合酢五合茄子をつけたる鹽水とをみな入れよくまぜて茄子をつけかめの蓋をよくして其上風のはいらぬやう紙にてよくめばりすべし又ながくたくわへるには鹽三合いれて七日ほど鹽をしするべし麴からし酢鹽水も前同樣なり茄子多くつけるときは右ぶんりよふの割にてますべし一ヶ月たてばよろし。からしづけ出したるのちはかめに風のいらぬよふによくつゝみ置かば其あじわいかわるとなしかめは溫かになき方におくべし

○英詩一章

淡路國洲本三丁目　洋狂生

HER GLEE.

The purest flame, the hottest heat
Is Woman's Power over earth;
Which mighty black and pale down beat,
And made the Eden, place of birth.

Of what? Of what? can thou tell me?
A birth of Noble, High, value—
The station He destined for thee—
Of woman, Mother, Social Glue.

Let her be moved from earth, to try.
What dark mist overwhelms human Race!
Let Lady claim with all the cry:—
"Can you still hold and hold your peace?"

How sweet, how mirthful, gay is Name!
What boon, thing, may exceed in kind?
Would She be praised, entolled—not Shame:
Tie, Pale, of Both, to bound, to bind.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●新報

○木村鐙子の送葬式は去二日午後三時より下谷徒士町三丁目の耶蘇教會堂にて執行したるに會式者三百餘名ありき式は海老名彈正氏の說敎、松山高吉大儀見元一郎兩氏の慰藉、及び生が履歷演述等にて四時半に了りそれより谷中天王寺墓地へ埋葬したり此にて會する者亦數十名ほどもありき當日植村正久君が弔ひたまへる歌ハ左の如し

愛は亡びず　加林多前書第十三章

去りにしひとの、こしかたを、かへり見すれバ、うつせみの、
もぬけのからと、ありしかど、こゝろはいかで、消えぬべき」
神のまさみち、分けのぼり、まめあるこゝろ、いやふかみ、
はじめたまひし、善き事業の、にほひはいまも、かぐはしき」
波風　いとも、あらき世に、うからはらから、ひとのため、
うきをしのべる、きみが愛は、おつることなし、いつまでも」
智識は廢　り、方言も息み、あだなる　榮利、失するとも、
いやしきをみな、をさなごの、所爲こそいよゝ、かゞやかめ」
おぼろに見たる、こひつじを、まのあたり見る、きみはいま、
あまつゝかひと、もろともに、エホバの愛をぞ、うたふめる」

○婚姻法　同法制定の順序をきくに去る明治十四年中內務省に於て之を取調べ第一章を結婚として第二章を離婚とし第三章を雜則とし第四章を諸書式とし之を婚姻條例と題し其草案を太政官へ上申され同官より法制部に附して審議せしめられし折柄參事院を設置されしを以て同院へ引續ぎ總會議に附せられ討議の上一時廢案となり內務省へ返戾されし由なるが昨年末に至り同省中央衞生會に於て再び之を問題として審議の末本年五月中其草案を內務大臣へ差出されしに同大臣ハ參事官某々に命して調查を遂げしめ內閣へ上申に及ハれ目下法制局に於て尙ほ調查中の由なるが其全編を婚姻法と題し其中を總則結婚（此中を契約、結婚法式、故障、取消、再婚の數項に分つ）離婚（此中を理由、熟談離婚、離婚の故障、離婚の効の數項に分つ）雜則、諸書式等すべて五章二百十餘條より成立つものなりと云ふ（八月廿二日郵便報知新聞）

○福岡通信　博多南北兩校及び福岡大名小學校等の女敎師二十餘名は早きは一昨年晩きは本年三月以來本縣師範學校の敎員甫守謹吾氏を聘して唱歌を研究せしが（樂器は風琴又は琴）諸子非常の熱心にて勉學されしを以て本月上旬までにて小學唱歌集卷の一だけを卒業したり近日內に唱歌大演習會を催す筈あり。福岡婦人協會の第四會は七月上旬福岡天神町甫守謹

吾氏宅にて開きしに會員の來會者五十一名招待員には大書記官廣橋賢光伯中川久知(華族師範學校敎員)の二氏にして演説者ハ神崎直三(修猷館敎員)津田利天(小學敎員)田中勘三郎(中學校敎員)の三氏なりき又第五會は八月一日同上の宅にて開きしに出席者四十余名招待演説者ハ隈本有尙(修猷館長)熊谷元旦(醫學士)野村荞(福岡新聞社長)の三氏なりし同會は會員日に增し現今は七十余名の多きに及び益々隆盛に赴くの形況あり(福岡婦人協會員某、報)

○婦人慈善會　同會員は本月十八日總集會を開き來る十一月に開くべき第三回の慈善會の儀に付協議あるよし

○婦人交際會　米國公使の夫人を始め內外の貴夫人の設立に係る婦人交際會は暑中休會なし居たりしが明後四日より再び開會するといふ

○基督敎徒看護人　横濱港の避病院は曩者俄に患者を增加せしかば看護人に不足を生じ俄に看護人を傭ひ入れられたるが此等の看護人の中には往々患者の心に滿足を與ふると能はざる者ありて之が爲動もすれバ避病院の評判までをもおとすとなき能ハざりしを此ごろ十餘名の信者ハ奮ふて其看護人となり入院せられたれば爾後は一層患者に滿足を與ふべきハ勿論にて人々は皆基督敎徒が愛心の厚に感ぜぬものなしといへり且此等の人々は同院にて多は看護人伍長となりて看護に盡力せられ居る由

○編物陳列　是まで本石町の柳屋にて婦人等が編物の稽古をなし居られしが此度都合に依りて兩替町の日本橋敎會を其稽古塲となされしが同會は追々盛んにて會員の數は已に三十四五名に及び且何れも皆熟達せしにより今月第一の水曜日を以て會員の作りし物品を同敎會に陳列して諸人の品評を乞ハれたるよし基督敎新聞に見ゆ

○貴夫人の贈與　日下長崎縣知事の夫人を始め同地有志の貴夫人二十餘名より先頃水兵暴行の際負傷したる人々に毛布一枚宛を贈りたる由は既に電報に見えしが其節右の人々より品物に添へて負傷者に贈りたる書面ハ左の如し

朝日に匂ふ山櫻と昔人のいひけむやふにこたび外國船の異人等がなみのさわぎをしつめむとしなとの風にあらなくも八十氏人の太刀かせに秋の木の葉のちることとく跡はかもなく治りしは皆ひとのよく知る所なれとそか爲に身をいとはてすゝまれしかたゞのあまた手疵負給へるありとかこは全くみくにの爲めに命を塵よりもかろむし義を山よりも重せられしなれは日下氏かめ子をはじめおなしこゝろさしのをみな等うちつとひ君たちか重き枕につきそひみとりの助

せはやと思ふもならはぬものゝするわさはかへりてわつらはしくやおはさむさはれかくはかりいたましう思ふこゝろのいとのかたはしをたにとていとあらく〳〵ゝかれとおのおのかたへ敷もの一枚つゝまゐらす用ゐ給はゝうれしうこそさらぬも堪ぬ此日ころいとゝあへしうおはすらめと八しまの外も敷島の大和こゝろをふりおこしいよ〳〵猛く健におはしましねといのるになむ

明治十九年八月廿四日

小野みち、松岡みち、淸水きい、須田いく、吉田きさ、師岡のぶ、阿部內、嘉村內、小山內　依田とも、猪飼たつ、富永きち、河西こと、佐々木わさ、牧野八重、瓜生內、山脇はる、池上つね、田代內、山根すゑ、吉田とみ、野間口內、金井內、白上貞子、日下うめ子、

負傷者十七名宛

○合衆國婦人官吏　各省の婦人官吏は總計四千人あるが多くは賤しからざる家族より出で或は有名ある將軍の寡婦或は前の州知事の女或は大統領又內閣員の親戚等にして首府中の美人又は有識者の名あるもの又博く旅行して各地の人情風俗を知り充分の敎育を受けたるものも多く其俸給は一年七百二十弗より一千八百弗までにて其事務は男子と均しく種々樣々なれども殊に婦人は通貨を數ふることに熟練を得て其速にして且誤りなきは男子の遙に及ばざる所なれば婦人の通貨計數官は七十五弗位の月給を得て毎月數百萬弗の通貨を數ふるといへり又年若の男女が同一の官衙に於て机を列ねて事務を取ることは屢々あるも同寮の男女が結婚することの甚だ稀なるは實に驚くに堪たる程なり盖し其理由は婦人の容色の醜なるにあらず其性質の惡しきに非ず又愚なるに非ずして一家より二人のものが官に就くは省令の禁ずる所なれば若し同寮の男女が結婚する時は其內の一人ハ辭職せざるを得ず而して華盛頓府は甚だ多く生計の費用を要する塲所なるが故なり且婦人の官吏ハ各一身の口を糊するには餘裕ある程の給料を得ることなれバ自分より多からざる給料を得る男子に嫁せんとするものは甚だ尠なし尤も同寮の男女が結婚したるの例はなきに非れども實に指を屈する程にて多くは上院議員下院議員新聞記者等省外の人に嫁するを常とす云々と米國よりの通信に見ゆ

（八月廿六日時事新報）

○ハシスフアル夫人　先年來より北海道函館港の米國女學校に居留して內外患者の治療を爲し傍ら同港師範校の英語敎員たりしハシスフアル夫人ハ今度朝鮮へ航行せらるゝ由

○外人と婚姻　獨逸國在留の西井富次郎氏は今度同國ハンブルクなるエフチラーダハー氏の次女と結婚したき儀を其筋へ願出たるよし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社 第二回點取文始末

緒言

本社は明治十八年七月第一回點取文題日本婦人改良論の應答を世上に募りたるに答文凡そ一百十一通を得その中貴婦人の應答に係るもの實に十五通ありたり當時の始末載せて本誌第二十二號の附錄に見ゆ」第一回の始末全く了する時直に第二回點取文題日本女子教育策の應答を世上に募りたるに本年五月五日より七月三十日に至る八十餘日間に答文を得たると凡そ九通貴婦人の應答ありたる者僅に一通に過ず之を第一回に比するに應答者の甚だ少數なる尤も憾むべしと雖も其說の皆な高尙なるは之を慶賀せざる可らず則ち照査點撿して最佳の答文三篇を採擇し之に甲乙丙の點を附して定規の賞を寄附せり三篇は悉く下に錄示すと雖も其他の如きも亦た女學雜誌上餘白あるの時追次に掲載して之を公にするの日あるべし

明治十九年九月一日　女學雜誌社

第二回點取文題 日本女子教育策

紀伊國牟婁郡潮岬　安原士權

●甲點

第一章　緒論

天地始めて開け晝夜あり寒往き暑來り陰究まて陽回る是に於て万物化育し同類蕃殖す若し夫れ春風駘蕩氷雪融解するに當りて滿山一色白雲を欺くものハ古への奈良の櫻にあらざれハ則ち仙源の桃花なり杜鵑一聲紅白花飛んで綠葉蕃茂し金風一たび吹て草木黃落し人事寥落月中天にあり孤雁北に去て歲復寒し噫是れ人世の旅日記なり偖吾人ハ何を目的となして此旅行をなすやと云ふに至てハ實に千古の一大疑問にして十九世紀の吾人の得て議定すべきものにあらず吾人ハ唯天地の化育に始り天地の化育に終る當に此間にありて吾人の幸福を完ふすべし而して其最大の幸福ハ果して何ぞと云ふに人各趣向好尙ありと雖も歸着する所同類を蕃殖し無事に人世の旅行をなし終るへしとの一點に外ならす道德の主義も實利の主義も此趣意を彩色潤澤せるに過ぎざるなり關々たる雎鳩嚶々たる麋鹿雌雄相和し各其天然を樂まざるものなし嗚呼人間男女の交際ハ不可思議の極點にして口頭筆舌の能く其實際を形容し能ハざる所なり

蓋し人間社會をして春容和氣極樂世界の有樣を寫し出せるが如くならしむるも女子にあり又修羅の巷と變せしむるも女子にありと謂ハざるを得す周の文王ハ后妃の內德によりて周の天下を治平せしとハ載せて詩經の開卷第一にあり和漢の學者

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

誰一人異議を其間に容るゝものなし源頼朝は關東八州の士卒を驅使して天下兵馬の權を握りしも尼將軍の功多きに居る由賴山陽の日本外史に見へたり又元弘の亂に賊魁足利尊氏連りに新田義貞の敗る所となり獨身西國に走るに當りて義貞之を窮追し其首を刎ぬることをなさす旗を倒し甲を收め兵を白旗城下に頓し遂に賊の再焰を致し異日北陸雪裏の歎あり義貞豈兵機を知らさるものならんや當年天子の侍りて重をなすの好男子なり而して一纎弱の勾當内侍別に臨んて情緒纏綿此好男子の心腸を蕩し顧みて機會を失ハしむ是れ千秋の遺恨史を讀むものゝ浩歎して巻を投する所なり其他一々之を數られハ殆んと際限もなき事なり試に下等社界の耳目を動かす所の演劇を觀れハ一に才子と佳人を以て組立てさるもの幾んと希なり何れにしても此社會ハ男子半分女子半分より成立つものにて吾人ハ人生の幸福を完ふせんと欲せハ先つ天下の婦女子に向ひて之を相談せさるを得す然るに東洋古來の習慣として釋迦の慈悲孔子の仁義も女子を社會外に放逐し去ての議論のみにして三從七去等女子にのみ不利益なる敎義を立て果てハ女子ハ一切他人と交通すへからすとなし深宮に幽閉し甚たしきは其足を縮小にして他人の交遊を禁し恰も男子の一玩弄物たるか如き殺風景の有樣に陷らしめしハ社會の爲め長大息に堪へさる所なり而して天地間最愛の子女を以て此不都合千万なる女子に一任し置き而して純良の成人を望むハ大に注文の主意を失へりと謂ふ可し果して彼眞正の人物を敎育し能ハさるを見呆然として落膽して曰く嗚呼女人と小兒は養ひ難しと其志や誠に憫むへし女子は何の咎ありて此憂苦を見るや女子果して敎ふへからさるか小兒果して養ふへからさるか此一段に至りては和漢の學者は社會に對して不親切至極といハさるへからす西洋諸國の有樣を見れは女子は完全に敎育を受け男子と同等の交際をなし男子も亦女子なりとて擯斥せす却て之を敬愛し子弟の敎育は女子に委托し志ほらしくも心事優美の姿を以て子女を家庭に薫陶し異日完全の人物を養成するの基をなす概して西洋諸國の女子は家内一切の事を負擔し男子をして内顧の患なからしむるものなり抑西洋の女子ハ特別の天性を備へ東洋の女子ハ然らさるに由るか否決して然らさるなり東洋女子數万の中には后妃尼將軍の如きものも鮮からさるへし唯全躰より之を見れは東洋の女子は西洋の女子に比して愚痴なりと云ふにあまて個は實に敎育の足らさるに由るなり余輩ハ今女子敎育に就ては私に策あるなり

第二章　勅令第十四號の應用

夫れ社會ハ吾人の集り成せる所のものにして吾人を舍いて他に社會あるにあらさるなり偖吾人が集りて社會をなすや吾人の祖先が自他生存の都合によりて互に約束をなし今日社會の基礎を立て吾人は祖先約束のあるか爲め止むを得すして社員の義務を負ふものなりや否ハ千歳の下に生れ來りし吾人なれは固より記臆し得へき筈にもあらす又口碑の存するにもあらされハ之を知るに由なし吾人ハ唯万物中にありて特別に言語の妙を備へて甲口を開きて乙其意を知り又禽獸蟲魚人間界以外に生存するものゝ朝に胎中より出て夕に運動歩行するが如きものにあらす必すや父母多年鞠育の勞を得されハ生存し能ハさる等より之れを考ふれハ吾人の此社會をなし來りしもの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天の賦性によらずんはあらす獅子は子を産して三日之を千仭の壑中に擠して其力量を試むる由なれとも人間社會には此危險あるへからす然らは懷抱三年は勿論牛馬の踏襲を受けさるに至るまては必す父母鞠育の勞を仰かさるを得す夫れ然り故に吾人は又子孫に對しては父母たるの責任を免るへからす然り而して未開の時代にありては口腹の養ひ能く其義務を盡くし終りしならんと雖も文化開明の社會に生して學問的の爲めに殺伐慘忍の苦を見さるものに至りては己か子女に對して兼て教育の義務を盡さゞるべからす若しも此義務を怠り社會は其弊に堪へさるか如き不都合あるに當りては一國政府として社會保護の責任を負擔せるもの之を瞥見し去るへからす是れ國家教育令の必要を生せし濫觴なりとす然れとも其教育義務たるや何の點を以て限りとすへきやは又一言の辨なかるへからす個は吾人の丁年即ち社會の實務に應し得へきに至るの年齡中にありて受くへき所の教育にして所謂普通學とは是れなり尚其上にて高等の學問を修むるものは又格別なり

嚮きに我政府は教育令を發し兒童六年より十四年に至るまてを以て學齡とし學齡のものは必す普通教育を受けざるへからすとせられたり然れども國家の事は政府の威力にのみよるへからすとは余輩の嘗て聞ける所にして政府も亦此に見し所ありしあるへし貧困等にして實際其兒童を教育せしむる能はさるものは地方官に於て其情を酌み之を猶豫せらるゝの制なりき誠に意匠細密なりと云ふ可し若しも政府にして事實の如何を問はす概して義務のある所必す之を盡すへしとなし單刀直入途に學齡兒童の戲るあれは警察官の手を煩はして一々之を學校に送る等の事あらしめは家に不學の徒なきは必然なるへしと雖も之に伴ふの弊害に至りては果して如何となすへきか實に緩急相制し寛嚴相應するにあらされは社會の福利を求むる所以のもの却て大害を來たその媒介たるを免れさるへし而して其經費は町村會の協議費を以て支辨せらるゝ事とせり是亦能く其普通たるの性質に適合し社會の福利を求むる所以たるに於て余輩の贊成する所なり爾來政府は民間の學者と與に教育の進歩を圖るの方に於ては蓋し至れり盡せり其成績文部省第十年報(明治十五年)によれは就學生の數實に左の如くなり

明治十五年全國の人口は三千七百四万一千三百六十八名にして其學齡人員は五百七十五万九百四十六名とす而して學齡人員中就學者と不就學者とを區別すれは就學者は二百七十八万九千七百七十六名にして不就學者は二百九十六万一千一百七十名たり故に學齡毎百中の就學者は四十八名五分一厘にして猶ほ其半數に及はさること一名四分九厘とす然れども夫の不就學生徒中既に小學科三ヶ年の課程を卒へたるもの十二万七千二百四十六名あり又未た初等科を卒へさるもの三十三万三千二百五十二名あるを以て此等の兒童を合算し不就學人員の總數より除去するときは其餘す所は二百五十万六百七十二名にして是全く教育を受けざるものたり故に學齡兒童にして全く一丁字を知らさるものは即ち百中の比例四十三名四分八厘に抵り其數の前年より減すること十八万三千四百十七名なり

又其就學者二百七十八万九千七百七十六名を男女に區別すれ

れ
男百九十三万六千十九名　女八十五万三千七百五十七名
なりとす又授業料の一項に付同報に曰く

授業料を收むると收めさるとは各地各校の便宜に任することとは既に教育令の許す所たるを以て之を收入する校數は大約百分の三十八强に居り而して其金額亦各差あり本年末の調査によれは學校總數二万八千四百四十三個中授業料を收むる學校は現數一万九百二十八個金額は四十四万八千二百五十二圓二十六錢二厘にして一生徒所出の月額は最も多きもの壹圓最も少きもの僅かに一厘たり蓋し都府富庶の地は其額頗る高きも太た意とせされとも僻陬遐境に至りては既に協議費の課出あり之に重ぬるに授業料を以てするときは啻に負擔に堪へさるのみならす大に兒童就學の路を塞くものあり是を以て某地方に於ては務めて之を輕減し或は全く收入せさるものあり是其校數及收入額の僅少なる所なり

明治十九年四月九日政府は又勅令第十四號小學校令第三條を以て兒童六年より十四年に至る八ヶ年を以て學齡とし父母後見人等は其學齡兒童をして普通教育を得せしむる義務あるものとすとせらるゝの裏面に於ては同第五條を以て疾病家計困究其他止むを得さる事故に由り兒童を修學せしむる能はすと認定するものには府知事縣令其期限を定めて就學猶豫をなすことを得とし而して小學校經費に關しては同第六條を以て父母後見人等は小學校の經費に充つるか爲め其兒童の授業料を支辨すへきものとす其金額は府知事縣令の定むる所によるとし而して同第八條を以て更に之を敷衍して曰く授業料及寄附金を以て小學校の經費を辨し能はさる場合に於ては區町村會の議決により區町村費より其不足を補ふ事を得と制定せられたり倩々之を觀察するに第三條及第五條の御趣意のある所教育令と異なるへし唯其間寬嚴の小差あるのみ然れとも第六條及第八條は大に其の趣を異にせるの觀あり何んとなれば從前町村會の協議費を以て小學經費出所の主眼となせしもの生徒の授業料を以て之に代ふる事とし而して其不足の分を區町村費より支辨せらるへきものとなせるの疑あれはなり實に兒童の教育は父母後見人の義務なり經費の支辨亦免るへからすと雖も經費幾多の金額を擧けて小數の父母後見人をして之を負擔せしめは能く之に堪へ得へきや余輩は竊に恐る昔日負擔の輕き時にありて就學生の遲々たるもの此の如し今後負擔の益加る何の餘力か子女教育の義務を盡すを得んや尤も實際兒童を修學せしむる能はさるものゝみは府知事縣令は期限を定めて猶豫せらるゝなれは之を實行するに至りては其止むを得るものと止むを得さるものとを區別せさるへからす其止むを得さるものとは從前其兒童を修學せしめ能はさりしか如きものをいふか果して然りとせは前日止むを得さりしもの今日俄に止むを得るに至るへき筈なけれは今日も尙止むを得さるもの尙多しとせさるを得す而して負擔の益加る猶是れ益々止を得さるものなり寧ろ同第十五條により尋常小學校を廢して小學簡易科となし其經費の全額を區町村費に仰かんか第十五條には土地の情況によりてとありて今日まて高等若くは尋常小學校の資格を有するものを以て俄かに尋常小學校若くは簡易科となすの聖意にはあらさるへし嗚呼今日は第八條に所謂る授業料及

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社告

●第二回點取文始末

右始末を本號より附錄となし後三號を以て全く揭了すべし甲乙丙の賞點を得たる者は

甲點　紀伊國西牟婁郡潮岬　安原士權
乙點　伊勢國多氣郡中村　小竹啓二郎
丙點　筑後國三池集治監傍　西原いの

右三氏なり因て甲點者に女學雜誌三拾冊、乙點者に同二十冊、丙點者に同十冊賞品として寄送すべし

第三回點取文題

日本婦人授產策

右文題に對し寄答の方は來る十月三十一日迄に必ず其答文を寄送あらんことを乞ふ右日限后到着の文は遺憾ながら社評の中に入らざるべし

右寄送の答文は社評の上優劣を定め甲乙丙三等の點を得る者には各左の賞酬を呈す

甲點者　女學雜誌　三十冊　無代呈上
乙點者　同　二十冊　同前
丙點者　同　十冊　同前

賣捌所取次の看官に告ぐ

女學雜誌大賣捌の書店中不都合の廉御座候節は直に御賣を中止仕候社則に付右樣の書店より本誌購讀の看官はそれが爲め御不便不勘と存じ候よつて向後右樣の次第にて書店より御配達不仕候節は直に本社へ御一報有之度(從來何書店より購讀せしとの旨御記入ありて)候早速郵送致し厚意を損せざる樣致度希望候也

廣告

六合雜誌

第六十八號八月三十一日發兌

●目次●文明道德相關論(島田三郎)宗敎の起原(小崎弘道)羅馬字會と假名の會(植村正久)スペンセル氏の哲學を論ず(ジエームス、マコッシ)○學術○心理學講義(浮田和民)○演說○源賴朝を論ず(田口卯吉)○雜錄○宗敎上の問答二件、ムコッシ氏のスペンセル哲學論

一冊定價拾錢、半ヶ年六冊前金五十五錢、一ヶ年同一圓、但し郵便稅を要せず

基督教新聞

第百六十二號九月一日發兌

○今日の日本國に宣敎者の必要○敎報十件○歐洲諸國宗敎改革の顚末○ムーヂー氏の一工夫○北海道見聞の一斑○雜報○英文敎報●一部金三錢每週發行郵稅一錢

東京々橋區瀧山町六番地　警醒社

通俗學藝志林

第三號八月十日發兌

目錄●日本敎育ニ就テノ所見樂水舘主人●大陽化育新論哲學博士ブランチル氏著中川重麗君譯●北海道土民熊祭の記(插圖)ドクトル、ショイベ氏●色染問答平賀義美君●スペクトラム田中竹次郎君●衞生の普及を望む小原賴之君ノルデンスキヨルド氏ノ略傳(接前號)●通俗學藝志林の發兌を祝す(前々號の續)●金剛石の製造法●農工雜談●東京駒塲農學校景況●兒童の遊戲小笠原島記事概略●詩歌●●雜報數件

大坂東區淡路町二丁目十三番地　通俗學藝社

東京輿論新誌

第二百五十三號八月廿五日發兌

(社說)長崎ノ近事及ヒ其處分方法、法律第二號公證人規則ヲ讀ム(論說)一夫一婦ハ人ノ大倫ナリ第八婦ハ夫ノ所有物ナル歟、日本航業論(前號ノ續)(時論)東京五新聞社說ノ要旨(雜報)長崎事件顚末其他時事要報數件(一冊金五錢每水曜日發兌)

東京々橋區尾張町新地七番地　嚶鳴社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛逓局認可

和漢古今名家詩文 **圭玷新評** 第五十三集 八月廿日發 定價 五錢

右ハ元來邦人ノ詩文ヲ刪評シタルモノヲ掲ゲ來リシガ本集以下邦人ハ勿論文ハ韓柳歐蘇詩ハ李杜韓白等漢土ノ名家ト雖ヒ苟モ瑕瑾アルモノハ嚴正ヲ加ヘ大ニ詩文講究ノ便ヲ開カントス且集中ニ文藝雜話典故釋疑西洋英傑傳課題詩文等ノ諸篇ヲ設ケ頗ル修正ヲ加ヘタレハ益購讀アランコトヲ希望ス

發行所 東京神田區雉子町 團々社
大取次所大坂備後町四丁目 此村彦助

東京經濟雜誌 第三百卅一號八月廿八日發兌

●官令○社說○東海道鐵道、我日本亦万國博覽會を開設せざる可らず●清艦乘組員長崎暴動○經濟沿革史○寄書○經濟雜誌記者の議論、醫師の診察料を定め置くべし、少しく其色を和け玉へ○雜錄○虎列剌患者總數、虎列剌病の影響○長崎始審裁判所撿事の求刑書、地方御前の競爭、米俵改良其外

一冊十錢、郵稅一錢、毎土曜日發行

東京京橋區彌左衛門町七番地 經濟雜誌社

小兒健全示要 岩田文吉編述、定價四十錢

右は慈母、乳母の性質より乳汁の事、乳離の事、人工養育法、等の事を信切に敎へたるもの也

東京馬喰町二丁目 島村利助

松山高吉君著 **家のをしへ** 一冊、定價金三錢

東京三十間堀二丁目一番地 江藤書店

共立女子職業學校 去る一日より本校に於て事務取扱候 同校幹事

神田錦町二丁目一番地

定價

一冊。五錢	郵稅。一錢	(但府內無郵稅)
十冊。四十八錢	郵稅。十錢	(同前)
廿冊。九十錢	郵稅。廿錢	(同前)
卅冊。一圓卅錢	郵稅。卅錢	(同前)

一ヶ月分女學雜誌代價	十五錢	府外ハ十八錢
二ヶ月分同	三十錢	府外ハ三十六錢
三ヶ月分同	四十五錢	府外ハ五十四錢
半年分同	八十八錢	府外ハ一圓六錢
一年分同	一圓六十錢	府外ハ一圓九十六錢

廣告

一行 (廿八字詰)	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引

但し不道德なる事物の廣告ハ謝絶す有益ある事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍ハ一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評す

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町 (大賣捌) 巖々堂
東京神田區雉子町 團々社支店
同 神田區佐柄木町 東海堂
同 日本橋區新葭町 良明堂
同 日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同 京橋區木挽町壹丁目 萬字堂
同 本郷區元富士町 盛春堂
同 本郷區春木町二丁目 解明堂
同 牛込區肴町 活神堂
大坂備後町四丁目 岡島支店
伊勢國松坂白粉町 家里初枝
東京芝西久保櫻川町 (支局) 萬春堂

發行所 本局 東京本郷弓町壹丁目廿番地 **女學雜誌社**

持主兼編輯人 巖本善治
印刷人 森田豐

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY